

季能古博物館だより



上掲は、大山右一画伯作（説明は本誌11頁上段）

亀井学を大成した

大儒 亀井昭陽伝(十)

庄野寿人

- ・ 亡児脩三郎の思いなお絶ち難く
- ・ 昭陽筆硯の収入減で家計赤字
- ・ 益富捕鯨の長州領進出を幹旋

文政七年（一八二四）の昭陽・正月を紹介しよう。

朝、日照り。

七書生（亀井塾の内寮生で、いずれも遠地のため正月帰省をせず寮に残った書生たちである）が年末から大鯛を用意し、これを亀井家に饗してくれた。博多の生民（南冥に医学を学び博多に開業しているが常に亀井家族並みに行動する）、道祐（昭陽の従弟で医師）これに大信（亡弟大年の長子、これも父の医業を継ぐが独身のため伯父昭陽家の正月に加わる）、孝甫（これも親族の子）など皆な、昭陽家に来り元日を共にする者たちである。右仲（塾生）詩作あり、と披露する。後に発表させる。

これらを一緒にして祠堂（亀井家の神位を奉する）に、先ず献茶、鏡餅を供えること例年の通りである。昭陽の背後に書生および家族皆な同時に並んで礼拝する。

亀井家の正月としては甚だ寂しい

のは、昭陽の心中に一昨年亡くした「三男脩三郎の六歳死去」を未だに心の奥に抱いて亡児に対する眷恋（けんれん）思いこがれる。たる父性の真情を絶ち難くしているのである。

儒学を奉じる科学者昭陽にして甚だ不可解とされるのであるが、周囲も世間も、昭陽心情に深く理解を示し、年賀の客も少なく、また訪れても気を使って早退するのがよくわかる。

宵闇に及んで、昭陽は自ら川の浅瀬（瀬）が満ちていると渡れないが、干き潮には、川底の砂床を見て徒歩できる）を渡って対岸の浄満寺亀井家墓所の脩三郎墳墓に香燈を展じた。以上は、すべて昭陽の『空石日記』の元旦記事そのままである。因みに文政五年の元旦記事を比較のため次に掲記する。

正月丁未朔、東方微に白む。井華

写真：杉山謙

水の初水を汲むは脩三郎なり。躍然

として先に起き以て各色の祝餅一つづつを賞で喜び、家人皆な起きるのに脩三郎は立て己れの容を改め、まず余(昭陽のこと)に向かつて拝

礼、以下各家人にも同礼し、次いで半紙二つ折紙に色餅をのせて正堂前の机上に置かせると同並んで正面に一拜、次に各椀に少しく甘味を加えた井華湯(初水を温めた甘草湯)を飲用させた。これらは脩三郎が前の晩に母に話して用意したという。

昭陽が別に教えたものでもなく脩三郎が独自にしたものである。

是歳余年五十、内氏四十五、友也二十五、敬也二十三、義也十八、鉄也十五、世也十二、宗也九歳脩也六歳。既に享けて世也宗也は出でて遊行しているが、これは家人に話してのことである。脩三郎は書生らと八幡社に参る。

是の日は、後刻雨に急変し、義一郎(長男)も鉄二郎(次男)も外出せず、年賀客の対応を専らにした。客数二十九名という。劇しい風雨に御苦労のことである。長居の客もでる。

内書生から大鮮鯛を春巻として貰っている、これを吸物にして全員に賞味しようと妻に話す。

それと、余は今日から改号し「天山遜者」とする。但し、継続する日記は「空石日記」の題を変えない。

雷首山人(少梁の夫)が実家の年賀から夕刻に帰宅。これぞ昭陽が最も待ち望んだ婿なのである。

家人は早く寝せて山人と足爐を共にしてゆっくりやろう。

以上が文政五年の昭陽正月である。次に、孝鳥神童(脩三郎)のことを少しく記録しておこう。

「孝鳥神童」は、昭陽が亡兄脩三郎を追寵して贈った呼稱であるが、その呼稱にふさわしく、脩三郎の眞性は幼少にして孝悌の心を具え、聰明利発で諷詠に抜群の才をみせたという。

脩三郎は、昭陽が「玉容」と形容したように、女兒とみまごうほど眉目せずさで、その一挙手一投足そのままが父母の目を娛しませるに充分であった。昭陽の『傷逝録』は、その玉容の君が草花を愛し、且つ青蛙、子ねずみ、蚯蚓(ミミズ)などの動物をいつくしむ様子を描いて、あたたかい心の持主であったことを伝えている。

また他の條りでは「脩也、物を愛し、物を妄りに毀さず。生月の人、種三郎から贈られた木偶の鯨、捕鯨

舟二隻、六月中潮を以て至る。脩三郎の之を喜ぶこと甚し」という書出して始めて、木製玩具の鯨と捕鯨船を愛玩する我が子の在りし日の姿を思い出しながら、昭陽は次のように語る。

鯨舟は其れ製巧にして、朱緑にて之を塗る。故に未だ曾つて堂より降さず。没後に之を見るに、新至の時の如し。手澤(手の汚れ)未だつかず。既にその人を失い、木鯨は涕を垂るるも、復た生面を開かざるのみ。余は恒に之を諭して曰く。物を惜しめば物有り。脩也之を守れり。我が脩也を惜しむは、豈に翅物のみならん哉。惜しみて有に益することなきは、嗚呼、天なるかな。

脩三郎の急逝を天命としながらも、それからの昭陽がうけた衝撃は、かくも深い状態であった。時がたつにつれ、かえって脩三郎は忘れ難い存在と化する。昭陽は長、次男の平凡にあきらめを持っており、脩三郎の優れた天分を亀井学の将来に大望を持ち得たことも多分であったと思われる。

(以上で文政五年元旦記事を了す)

二日、旧門弟たちの年賀が相次いで来る。驥二郎、達仙、文端らは、皆な酒を提げて来るので、内書生も

一緒に講堂で輪をつくり、昭陽を囲むようにする。これに昭陽は中座し早く臥すことになる。丑之刻(深夜)起きて詩作五首し天明(夜明け)に至る。

三日、長男義一郎、二男鉄次郎兩人共に外出支度する。昭陽に命じられて城代組頭衣非氏に年賀し雉と清酒を献ずるのである。

有田村の本助が酒を以て来り賀す。早船助次郎(昭陽妻の実家当主)が来る。大生、新助も来り、皆な食膳に着く。出でて荒戸、伊崎(昭陽義弟)の山口白貴家に廻わる。長大夫父子が来り昭陽共に酒をする。昭陽は寝に就くが夜起きて作詩。

四日、昭陽初めて外出し、博多と谷の各家に廻わる。帰宅すると達仙が来ており賀酒を酌みながら昭陽に字を書けと求める。蘭哉、方金(一歩金)を年賀とする。清次郎は鈔(藩札のこと)廿一匁を以て挨拶。その他四名の年賀客に銀(一分又は二分銀のこと)これに酒、南遼銀、鈔六十(一兩に相当する藩札で銀六十匁か)を贈られる。

五日、昭陽姪浜の早船家に年賀。同席になった甥の大生および同家に嫁した二女の敬(早船家に嫁す)に飲まされる。詩二首を揮毫し、慶次

に賞味しようと妻に話す。

(3) 政も五島屋(早船氏)のことで昭陽妻

て昭陽も亀井家の内証も苦しい。従って昭陽も亀井家の内証も苦しい。

揮毫によって謝礼金として年間四、五十兩の余得収入があるが、脩三郎死去以来、この要請に応じない。

次に、好音葉代南金十二とあるのは、今宿に移った好音亭即ち雷首と少栗からの請求であり、これに支払う葉代のこと、南金十二というのは南遠銀二分十二枚で金六兩(又は一分銀十二ならば金参兩となる)のことか。相当の葉価代とされる。

六日。圓福寺賀茶。桑沖と慶次より鯨一荷。伊佐来り賀茶一托。鱗分賀銀。源次郎賀銀。深恵(糸島竜ヶ橋の寺僧)臘十六と送鈔百五。夜、登と駟牘、(江戸勤番となった山口駟太郎からの書信)、世(昭陽三女)より鼓七茶(七草のことか)を各々貰う。

笠廣生、道太郎(平戸・生月島の益富家子息)皆一緒になって西新亀井家に来賀。これには昭陽も大醉して寝込む。
年賀客から酒四升、塩鯨一樽、鈔二兩二分を貰うが昭陽に明細が不明。初更起きて詩作四首、四更(暁に近い約二時間)また臥す。

られた。これに益富当主の実弟又右

として樽詰めにしたもの)鯨肉の最上を特選にした年賀の贈り物が届け

ことにすると思われる。

好音亭即ち医師雷首に対する未払の葉代とともに従前の亀井家に見られないことである。好音亭も昭陽の事情を知るだけに、その好転を待つことにすると思われる。

この亀井家計の出超つまり資金不足は、従来になく昭陽による収入減が主因とされる。
年計から余剰金があれば五島屋の質資金に運用させる予定であるが、それどころでなく年計は赤字である。

の(実家)に一切を契約委託している。即ち、藩からの扶持米(年収約七十五俵)、これに諸手当八俵加給と亀井家が所有する鳥飼村の田地約八反歩の手取り収入をすべて五島屋に代收させ、これらを担保として亀井家は必要に応じ家計支出とその他の現金支給を受けるのである。

得た。それでも福岡藩に扶持支給を

えようとすることがあるが、益富家はこれを固く辞退。結局益富家の商用連絡所を博多に開設する藩許可を

摺をして生月に帰ったばかりである。

三年前から鯨屋益富家の博多出張所が設けられ、これに当主弟の又右エ門が詰めているが、暮れに正月休みとして店を閉めると又右エ門が挨拶をして生月に帰ったばかりである。

製品の到来となったことがわかった。近く、益富家から挨拶に向くと口上を添えてのことであった。

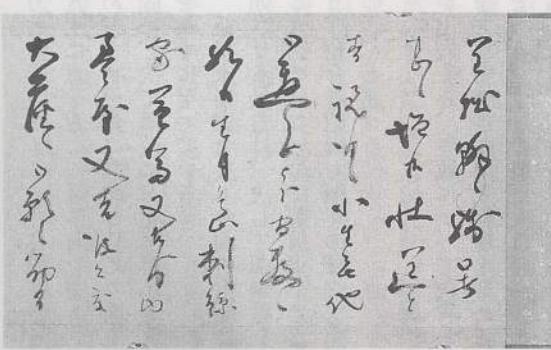
追いの特認を要望し、昭陽に長州藩要路に幹旋を依頼されたことがある。これを昭陽は儒者同志の縁故で長州藩校「明倫館」館長の山県太華に「長州藩にも最大効果をもたらすもの」と懇切な周旋を頼んでいたのである。すでに三年前のことで、昭陽も経過を知らないでいたが、その後益富家の運動も効を奏したとのことで、この意味合いもあって美事な鯨製品の到来となったことがわかった。

主張され、これを拾人扶持に低額されることで決着した。

以上は、福岡藩の米作りと虫害対策に鯨油確保の熱意がうかがえる話である。

昭陽の人柄は、父南冥ほどの大きな振舞いはないが、この生月益富家の捕鯨業を長州藩の領海まで進出させる下工作など、地味ながら案外に上手な紹介の仕方をする。

いま、益富氏とその番頭を長州藩に登場させる昭陽の紹介文書(幸い亀陽文庫収蔵資料に原物があるので次に掲げる)。また、この紹介事項について説明を加えることにする。



会員からのおたづね「少梨さんの子供教育を…」お答えに兼ねて今宿亀井家の諸般ものがたり

女性会員の方から「少梨さんの子供教育を教えてください」と、質問されている。良い機会であるので本誌記事として御参考に供します。

少梨は、結婚後八年の文政七(二〇三)年、閏八月六日長女紅染を出生します。同年の春頃から身籠た徴候が見えたので、昭陽ははじめ皆んなに喜色が見えました。

昭陽は、出入りも多く塾生を含めて多人数の生活で多忙な亀井家を離れ、静かで充分に御産の準備が出来る所として、郊外の今宿を選び移転を促したのです。婿・雷首も今宿が今津、西浦といった豊かな漁村基点であり、前原の商業繁栄地も近く、

医業も最適の地と考えたと

思います。下働きの男女共に、すぐ備入れできました。雷首は学塾も併営したので、この弟子筋の世話で信用できる使用人を得ました。

出産は今宿移転五カ月後です。少梨母の伊智も二十日も前から泊り込みします。母は、少梨ほか七人の子女を出産経験しており、少梨に最も

安心できる存在である。これに百道の向い家の「染婆」(亀井家前の染物屋女房)まで手伝いに張り込み、

これは母の伊智に心強い助っ人です。少梨は、初産であるが心配のないお産であったようです。

父昭陽が、七日の命名符箋に輝(テル)。

稔(トシ)。

紅染(コヅメ)。の三つを用意しているのに、皆んなが「紅染(コヅメ)」に一致して決まった。

こぞめは、紅(こう)に略して呼ぶ習慣がついた。

紅染に対する儒学教育は記録に残されておらず判らない。

わずかに、習字一片

仙人下九天



「仙人下九天 紅」とした五字一行書に小さく紅とした二字署名の

紙が、今宿の少梨後嗣(亀井准輔氏)宅に残るだけである。すでに落款印も堂々とした二・五糶角の印材に「亀井紅染」四字彫り込みがあったことがわかります。

こうした紅染遺品が全くないのは、

すべて紅染に付けて埋葬された、としなければならぬ。

わずか五字一行の一紙。現代の年齢で、五年六カ月という少女習字を見て、その非凡に驚かぬものはあるまい。さすが、少梨子である。

おおろかで少しの気取りもない書とされる。

さて、可愛い盛りの紅染を失った今宿・亀井家であるが、医業世代を立てる思案はつづいたと思う。

紅染を亡くした四年目、少梨の弟鉄次郎(陽洲を号する)に、天保五年三月二番目の男子出生。永之進を名乗る。

なお文政十二(一八元)、十二月父昭陽は隠居し、当主は鉄次郎である。

父昭陽の誠実と城代組士としての諸役勤務をすべて皆勤で勤め上げたという実績が、城代組頭から藩重役に信用となつて、次の陽洲代に酬いられたとされる。

少梨の永児貰い受けは、陽洲にも姉の切実な気持ちがかかるだけに、承諾し、誕生から一年二カ月後の天保六年五月に、永児は今宿亀井家に移された。乳母は志賀島助次妻、かねての話し合いですぐに付いた。

翌七年二月、永児に痘発症が見られた。幼児期の天然痘は、当時の幼児死亡率を高くした難病の一つであるが、永児は比較的軽い経過で済んだ。雷首の懸命な治療によつたとされよう。百道の本宅では、父昭陽が五月十七日死去。本家の陽洲も、今宿分家の少梨も気の休まることはなかった年である。永児は八月に麻疹(はしか)を

患うが、これも軽く抜ける。同年九月末、乳母を帰す。

翌八年、永児四歳すこやかに育つ。九年。少々別事に移る。近郊の小都会、前原の富商「錦屋」が、主人以下十六名が一斉に痢症罹患。急性伝染病の赤痢である。赤痢は吐き下し、これに強い腹痛(裏急後重と呼

ばれる「しぼり腹」で苦しむ。大人でも死亡率は高い。

わが国でも戦中期まで高い発病が見られた。戦後の抗生物質の薬用が普及し絶滅に近く、一般に忘れられた状態になった急性伝染病の一つである。昔は治療も困難とされた病気であった。

綿屋は、平素の患家でなく、雷首を迎えた理由はわからない。

招かれれば医師良心として診療に当たらねばならない。

痢病と称する病気であるが、赤痢という病名はない時代である。

治療がおくると死人も出る。

そこで雷首は「モルヒネ」を使った。全員が病苦を忘れたように笑いを見せるようになった。

さあ、次の薬は一寸飲み辛いよ。しかし、この薬を飲まないと死ぬことになるよ。と真剣さを促して、「クレオソート」を服用させた。まだモルヒネの麻酔効果が残っている

こともあって、全員が服用を終った。寝られる者は眠りなさい。眼が覚めたら治っているよ！と安心させる。

多くが眠ったようである。

結果は、全員完治である。

十六人全員が助かった。この話は

広く知られた。

モルヒネもクレオソートも初めて経験した人たちである。薬の効きめもてきめんである。

「綿屋」からは、莫大な謝礼と、今後の主治医を頼まれるに至った。

天保九（一八三六）年である。

こうした夫雷首の活動と、すぐれた医師の腕前はすぐ世間の信用となる。

少槩の家計も豊かになる。

今宿の家に書庫が増築される。これを五年後に総白壁、瓦屋根の土蔵造りに改築する。さらに翌嘉永元年

に別棟の甘泉楼を新築、旧屋の好音亭を離れにし、浴室を新築、これに新井を掘る。この総費八十両を要した、と。（年鑑記録）

少槩は、永児の教育には慎重を期した。今宿亀井家年鑑記録によると

永児十歳、詩経卒業とある。すぐ尚書に移る、と。（天保十四年）

翌、永児十一歳、尚書、傷寒論卒業と記録される。傷寒論は医師必修

の中国医学原書である。博多の平島生民が今宿家訪問。永之進の傷寒論

卒業が、ただ同書の通読可能とするだけでなく、すぐに治療応用が自在

であると褒めながら、親父の患者診療を見ながら勉強の効果である、と。

生民らしい関心を見せた。生民は、

祖父南冥の高弟で博多で開業しているが、気持は亀井家族と変わら

ず、父昭陽が死ぬまで生民を信頼、娘婿の雷首は酒の相手だけに終始した。

時々には気にして雷首と飲めば百薬の長となるので、これも診療の一つだ

よ、と。笑顔で言っていたのも父の憶い出の一つとなっている。

生民は、永の父親雷首の死後は、自分が永を同行して長崎、江戸に医者修行を自分も一緒に勉強できると

終始行動を共にした。

永は、通称を雋永（しゅんえい）としているが、本稿は、永で通した。

少槩晩年は、永に甘えた母親になるが、少槩の書画作品が広く有名になるにつれ、永の手みやげになると

考えた時には喜んで提供した。

少槩は、夫の雷首死後は、寂しさをまぎらわせるかのように、詩書画

作品に打ち込んだ。また、永に対しては生みの母と同様、永も同様に仕

えた。

永は、廿二歳の四月に平島生民の仲介で、博多の川渕氏娘と結婚。嘉

永七年である。同年十一月に安政改元となる。この改元に先立つこと五日、博多の平島生民が死去する。

安政三年正月十四日、永の第一子

緩之が出生。少槩は、この女兒をこ

よなく愛した。

少槩は、安政四年七月六日、逝去。夫の雷首に後れること五年である。

二ヶ月後の九月、少槩を追う如く緩之の幼い命も昇天した。

亀井一家の菩提寺浄満寺には、大祖父聰因以来の代々とくに南冥を中心にした五亀と称される者、これに

少槩・雷首の墓も場所を同じくし、此の墓域一画は重要文化財（史跡）

に指定されているが、少槩を追った緩之も少槩に抱かれる如く一緒に埋葬され、少槩墓に緩之と添え刻りさ

れている。

少槩葬儀の次第は、後嗣家の今宿亀井家に保存されているが、筆者に

浄満寺先代住職から語られた言葉は、少槩葬儀は会衆も多く、記帳に溢れる人々が多数あり、これぞ、亀井家

も予期せぬことであった。

少槩に、大衆人氣が如何に高かったかが知らされたのである……と。

この亀井家墓地には、近来参詣者が多い。早くは明治に、小倉転勤の

森鷗外が、公務出張の余暇に参詣、また私事として再度おとづれて同寺

住職と亀井におよぶ談話を持ったとされる。それにしても鷗外好みの歴史

史史談に至らなかつたのは、いささ

か残念にされる。

亀井家墓地の重要文化財指定を境内にされる浄満寺は、国道202号線に面する。同寺の山門脇に「亀井南冥・昭陽両先生墓所」とした高い石碑が建つのは美事である。この碑を寄贈されたのは、古い郷土史家の「木下讀太郎」(故人)さんである。良いことをしていただいた、と常々思っているの、誌上で失礼ながら感謝を述べておく。

亀井昭陽の女の子は、少栗を筆頭に三人。次妹は敬(たか)、三妹が世(せい)、四妹は宗(むね)、この三女を補稿のつもりで、少しく話しておこう。

二女敬(たか)は、姉の少栗におくれること、二年と五カ月の寛政十二(一八〇〇)年七月十四日、母の実家である姪浜の網屋町五島屋の屋敷内で出産します。母がお産帰りで実家に帰ったのか、どうかは定かではありません。というの、姉少栗の時はお産帰りに亀井家の唐人町屋敷が近火に類焼したのですが、敬の場合寛政十二年の正月元旦、一昨年の大火後に父昭陽が唐人町の旧屋敷跡に自宅と家塾を再建、ようやく家族も書生たちも落着きかけたところに、又々元旦の夕刻、これも町屋からの出火に類焼、これで昭陽一家は

母の実家五島屋に再び仮住居しました。この時すでに母は妊娠三カ月であつたわけですね。

父昭陽は、城下の住宅、商家が町通りを形成する屋敷町で二度の火災にコリゴリしています。

祖父聴因が自分らの将来を考えて明和元(一七六四)年、姪浜から城下唐人町に大移転を実行、亀井屋敷六百坪という武家屋敷地を買い、これに

居宅、医業棟、また南冥の学塾棟を整備していたのが三十四年目に大火災で焼失、一年後に旧屋敷跡の再建が、又々の罹災ということになって、昭陽はついに祖父に初まる城下進出を断念したのである。二女敬の出生から九カ月、享和元年五月、百道新地という新しい場所に新築。一家あ

げて引き移ります。新しい亀井屋敷は、東側の樋井川という流れ豊かな川、があり、屋敷の三面は百道松原という砂丘一帯が松原の中にある。北は遠浅で満潮時でも百米の距離をおく。亀井家の出入りは、五〇米南

の唐津街道が松原内を通過しているのに接する。元の敷地も唐津街道に接しているが、これを直線で図上計測すると約一料弱で、この程度ならば昭陽の登城と組頭衣非氏屋敷(西公園下)の往復に決して苦になる道

程ではない。

さて、敬女のことであるが家庭内のしつけは母仕込み、その他の修業まして学問的なことは少女期から成長を通じて昭陽の女性観から全く見られない。自らするなら別であるが手を貸して教えるなら導くなど全くしない。少栗の場合は全く自発的な学習から始まったのである。

女性家事と育児、これ以外に父昭陽は考えていない。

敬については生後すぐに、母実家の五島屋におさまることに親戚皆な

が取り決めていた。五島屋は母の父「正朔」の死後、すでに後継ぎになる助八(母の兄)が若死しており、このため養子を迎える以外になく、これに敬は養子の嫁として、早船家の血統保存が先行していたのである。

五島屋は番頭以下の使用人も多く営業はつづけられていた。このため敬は女主人として十五歳から同家に泊り込むことが多かった。十九歳になって本家筋になる橋本屋の次男助

次郎廿歳が養子入りし、文政二年九月両人の華燭の典があげられた。

これに先立って、敬は武家の子女であるため、藩法による他家に嫁す許可が必要で、父昭陽から手続きされ結婚一カ月前に許可を得ていた。

五島屋の妻に納まった敬は、女子二人をつづけて出産、まわりに気をもませたが三度目のお産は男の双生児となった。秀五郎、助次郎であるが、助次郎の系統が姪浜に残り、いまの早船正夫さんは助次郎・敬夫婦から四代の直系である。

次は三妹の世(せい)に移る。世に至っては本人の事歴は、現在まで全く手がかりがない。ただ亀井本家の年鑑に文化八(一八二二)年七月廿三日出生。同十四年正月世子痘を記事に。幼児の痘は早く罹って早く治ること。さながら天に命を賭けた関所である。

世が姉の敬に十一歳の開きがあるのは、生後すぐ没した「妙露童女」、これに兄の蓬洲、次兄暘洲の出生があつて本人、これが十一年の開きである。世女は、廿二歳の天保三(一八三二)年二月廿八日付結婚の藩許を得て藩士宮井氏に嫁す。翌四年正月廿三日女子出産。六年九月十日世也挙女。

いずれも出産は亀井実家帰り。天保九年宮井氏東従世也来寓、十一月廿七日男子出産。世女の夫「宮井氏」は、藩主参動に従い東上。留守中に世女は出産に実家帰り、男子出生。命名虎雄。としたことがわかる。

(本号10頁につづく)

「老子」を聴く (四) 安 陪 光 正

鹿 垣

八回目の老子講義は十二月十日、暖冬で小春日和、渡船場からうららかな海の上に能古島が横たわる。島の中央に小学校、その左下に博物館の建物がキラキラ光っていた。島の左下半は紅葉林、左手の山の五合目あたりから、右へなだらかに低まって博物館の下まで五色に彩どられていた。その上は常緑樹林で明らかかなコントラストをなしている。今までも何度も渡船場や甲板から島を望んだが、このような樹林の境界線には気付かなかった。一月十四日の講義の日、前回の思いで両者の境界線を求めたが、すでに紅葉林は寒林に変わり、前のようにはっきりした境界はなくなっていた。この紅葉樹林は島の約五分の一を占め、その下から海岸にかけて畑や人家が並んでいた。それを望みながら、私はふと両者の境界線が、かつて人と鹿を住み分けた「鹿垣」の線ではあるまいかと思つた。能古島は藩政時代、領内唯一の藩主の鹿狩場として樹林の伐採

を禁止し、鹿の自生を計った島である。私はかつて、常緑の山に残るこの鹿垣を見たことがある。椎・樫・椿・竹などの鬱蒼と茂る大樹の暗がり、高さ三メートルほどの石垣がその面影を残していた。鹿の住む山側は垂直に、人の住む海側は少し斜に石積みするものであった。昔鹿の住んだ原生林は、椎や樫の実が存分に降って、彼等にこよなき餌を供したであろう。鹿はよく海を泳ぐ。対馬では今に島から島へ泳ぎ渡る鹿を見る。角を波間に光らせながら泳ぐ鹿を見たという人は少なくない。山の餌が少なくなれば、鹿は人里に出て餌をあさるから鹿垣は海の中へも伸びてきたにちがいない。沖繩の蒼い海へ伸びていたフェンスの猪垣を思う。その時はじめて、猪が海や川を泳ぎ渡ることを知った。

鹿 狩り

『黒田家譜』寛政十年(一七九八)三月の記事に、「三月廿五日、長舒来られしかは、長順対顔饗心せらる。明る廿六日長舒乞て残島に獵せられ、

黒田美作、浦上敷馬、野村隼人等も是に会しけり」とあり、また『秋城御年譜』にもこの鹿狩りを「三月廿四日より福岡御出、残之島御獵、鹿百六拾四頭御獲物有之」と書いてい

る。文中、長順は福岡藩主、長舒は秋月藩主、黒田美作・浦上敷馬・野村隼人は福岡藩の重臣である。

この詳細について『秋月史考』は、「三月廿六日、七日福岡残之島御鹿狩、八十二頭・秋月二十人、四十三頭・福岡衆十一人、二十七、犬喰并船にて取、二つ・生捕、十・鹿の子、六百六十四疋。右之内十八疋は朝陽院様(長舒三十四歳)御打留。七拾八疋秋月為御持と成、二疋は活ながら宿駕に乗せて御取寄に成」と述べている。この大量の鹿を福岡から秋月へ持ち帰り、家臣や主だった町民に与えたという。当時牛肉(塩漬けか干肉)は、長崎に求めて葉喰いとした時代で、大変高価なものであった。猪や鹿の生肉は更に高価で一斤銀八分から五分、下賜された鹿肉に臣下一同歓声をあげたにちがいない。

島の鹿は、昭和二十年の敗戦までは六、七百頭いたが、密猟や進駐軍の鹿狩りによって、二、三年で全滅したという。密猟者は角を切り、皮

を剥いで肉を捨てた。進駐軍は集団で来て鹿を打ち、バーベキューにして肉を食い、骨や皮は地中に埋めたという。以来能古島は、鹿のいない島となった。

第三十三章

月一回の講義も九回となり、初二十名をこえた受講者も今は半分へった。老いたるあり若きあり、男あり女あり、どんな目的でどんな職業の人たちが老子を聴くのかと思う。お互いに話すことも少なく、ただ机を並べるだけだからである。講義前のひと時を、私は隣の女性へ話しかけた。

「講義もあと二回、三月で終わりますね。話を聞いている時は解つたような気がしますが、帰りの船の中で考えているとよく解りません。三分の一もわかるでしょうか」
「私もですよ、私それを聞いて安心しました。私だけが解らないのかと思っていました」

「先生は、学者によって解釈もいろいろだと言われるし、それぞれに解釈していいさうですからね」

こんな話を先生が耳にされ、「今日は第三十三章からですが、少し味の素をふりかけて、味つけをして話しましょう」と言われる。お陰

能古博物館だより

で今日の講義が一番面白かった。やはり味付けの効果あって、私は私なりに勝手に感想を書いてみた。

「知足者富」、足るを知る者は富めり。満足することを知らぬ物が富んだ人である。我々は皆欲望の塊である。

一つの欲望が満たされれば次の欲望が生じ、次の欲望が満たされれば又次といったように、欲望には限りがない。限りない欲望にかりたてられて、心安らぐことのないのが常人である。老子は足るを知れと言う。足るを知ることによって、心の平安が得られると説く。

他の章で、

「禍莫大於不知足」、禍は足るを知らざるより大なるは莫し。といっているが、これも同様な意味で、福と禍とを反語的に述べたものである。私の書齋の扁額は仙厓の字で「福莫大於知足」、福は足るを知るより大なるはなし、と書いているが、時々扁額に目をあげては、自分の知足を思うのである。

第23号
(9) 「死而不亡者寿」死してしかも亡びざる者は寿(いのちなが)し。死んだら、すべては亡び去って何も残らない。心身一元論的に言えば、脳がなければ精神はないと考えるのが科学的あるいは医学的立場である。

死して亡びないものがあるとすれば、心身二元論的あるいは宗教的立場である。死んでなお人の心に生きる、死んでもその精神が万世に伝えられるならば、それを寿とするのである。これについて先生は、林希逸著



荆州城北5キロ地点に楚の紀南故城址がある。題字は郭沫若による

『老子遺論口義』の注解を引用された。すなわち「孔子の曰く、朝に道を聞きて夕に死すとも可なりと、死して亡びざる者は寿がしと、もまたこの意なり。この一句言葉の解くべき所にあらず、自證自悟せば可なり」と。

また「春秋左氏伝」、襄公二十四年から「死而不朽」、死して朽ちず、を引用された。すなわち「最上の徳をそなえた聖人は立派な徳を立てて世に残し、その次の大賢は立派な功績をあげて世に残し、その次の賢人は立派な言葉を残すので、それほどどんな後世になってもすたれることがない。この三つのことを不朽という」

これらによれば「死して亡びず」「死して朽ちず」と言うのは、この三不朽を指すと解しえようと、言われる。

私は講義を聴きながら、河井継之助が言った「人は死んで棺桶にいれられ、蓋をされ、釘を打ちつけられ、土中に埋められて、然る後に出てくるような心がほんとうの心だ」というその心を、亡びざるの心、朽ちざるの心であろうと思った。青苔墓を覆いて知る故人の心、我々は如何に多くを身近な故人に学んできたことか。『老子』が著されてすでに二千年五百年、その教えは今に生きる力を我々に与える。まさに寿と言うべきであろう。

上善如水

先日私は久留米行の電車の窓から、駅毎に貼られたポスターを見た。そ

れはテーブルをかこんだ二人がワイン様のものを飲んでる図で、左に「上善如水」、右に「峰深水平」と書き、走る電車の中からでもはっきり読みとることができた。それが老子の言葉だと気付いた私は、下車した時ポスターの前に立ち、酒の宣伝であることを知った。老子の講義を受けているのだから、これは飲まざればなるまいと知人へ話しておいたら、一本買ってきてくれた。それは七二〇ml入りの新潟県湯沢町産の清酒で、「心如水之源、雪解け水のようにサラサラ飲めるお酒が搾れました。サラッとした飲み口には、あっさり味がよるしいようで。例えば和食なら鯛の酒蒸し、洋食なら生鮎レモン添え、中華なら春雨サラダ」とあった。酒が飲めもしないのに、老子の言葉にひかれて「上善如水」を宣伝する羽目になった。これを飲めば老子が身につくのであれば、大いに飲みたいところである。

老子に興味を持つ者は「上善如水」を見ればハッとしますが、この四文字にどのくらいの方が魅かれるのだろうか。千人に一人か、万人に一人か。現代は無用の用には見向きもしなくなつたが、それでは一寸淋しすぎる。

能古博物館だより

(本号7頁よりつづく)

世は、亀井家で、とくに勉強をし
たとも見えず、芸事に励んだ様子も
ない。婚嫁先の宮井氏は、藩分限帳
の安永年に馬廻組士に宮井圓次・百
五十五石、文化年の分限帳に馬廻組宮
井圓蔵、慶応になって同じく馬廻組
で宮井氏が見える。その外、無足組
城代組に同姓は見当らず、宮井氏は
馬廻組だけに出る姓である。亀井家
の諸記録には年鑑に世女の出生。出
痘、藩の婚姻許可、女子出産二度の
実家帰り、次で夫の宮井氏が江戸参
勤に従行、この留守に世女は実家人
して男子出生といった記事だけにと
どまり、別段に世女の亀井家におけ
る記録はない。

百五十石の馬廻組士といえば黒田
家中では上位の士中に入る。亀井家
が平士になっての身分は二段下の城
代組で、宮井氏が格段に上位である
が、これらは昭陽に格別気にかける
ことではないのであろう。

宮井氏の存在は、黒田家初期の慶
長、元和、寛永期に見えず、福岡藩
中期を過ぎて新規の士官であらう。
同姓の士家も見えないのも、新参と
されるところであるが、亀井家子女
の縁付きにしては格別である。

次は、末妹の宗である。
宗は、文化十一(一八四)年九月四

日、亀井家の百道新地の屋敷に出生。
父昭陽は四十二歳、母いち三十八

長姉友(少梨のこと)十七、次姉の敬
十五、長兄義一郎(後の蓬洲を号す)
十、次兄鉄次郎(後に陽洲)七、三姉
の世が四歳といった三姉一兄がある。
祖父の南冥は、宗出生前の三月二
日に逝去。その追善法要、初盆供養
がすんだところである。

亀井家は儒教を教授する家である
が、多くの儒学者は仏教にかかわら
ないのに亀井家は仏信心を守りつづ
けている。三年後、宗に弟(脩三郎)
が生れるが、縁うすく五年後に死去
長姉の少梨は、二年後に結婚する
が、宗の記憶にならない。この姉夫
婦は、宗八歳の時に亀井屋敷に引越
して、それから宗も気易くなる。姉
兄のうちで宗の印象に深く残ったの
は姉少梨と婿どの雷首である。

姉が、父屋敷内に好音亭を建てて夫
婦の住居に使いながら、姉が女子の
塾生を教えると、宗は七歳で姉塾に
東修を納めて入門、授業を受ける。

また、二年後に姉たちが今宿に移
ると、これに宗も従い、以後は今宿
好音亭の入寮生になって勉強する。

これで昭陽の女子のうち長姉少梨
を除いて三女のうち正式な教育を受
けたのは末娘宗ひとりである。

龜陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市)・天谷千香子⑤・西嶋洋子⑤
- 岡部六弥太⑤・村上靖朝⑤・星野万里子⑤
- 吉村雪江⑤・速水忠兵衛⑤・菱形シズエ⑤
- 田上紀子⑤・安松勇一⑤・宮 徹男⑤
- 上田良一⑤・西村忠行⑤・高田浩二⑤
- 桑野次男⑤・玉置貞正⑤・木戸龍一⑤
- 西島道子⑤⑥・原重則①⑤・石橋七郎⑤⑥
- 藤木充子⑤・和 宏①⑤・西川真澄⑤⑥
- 末松仙太郎⑤・板木継生⑤・行成静子⑤
- 鬼塚義弘⑤・吉原湖水⑤・中畑孝信⑤
- 宮岡洋一②⑤・石川文之⑤・都筑久馬⑤
- 宮崎 集⑤・岡本文蔵⑤・橋本敏夫⑤
- 岩下須美子⑤・斎藤 拓⑤・石橋親一⑤
- 古賀清子⑤・三宅碧子⑤・坂田泰滋④
- 山内重太郎④・星野金子④・若重二郎④
- 横山智一④・青柳繁樹④・吉村陽子④
- 桃崎悦子④・西 政憲④・林十九楼④
- 大神敏子④・安永友儀④・磯崎啓子④
- 土屋正直④・織田喜代治④・上田 博④
- 鶴田スミ子④・三角健市③・伊藤康彦③
- 石橋清助③・塚本美和子③・寺岡秀實③
- 柳山美多恵③・奥田 稔③・原田種美③
- 岸 洋子③・西尾健治②・長八重子②
- 黒川松陽②・日野和子②・隈川清次②
- 長尾茂穂②・井上敏枝②・平河清次②
- 葉山政志②・久芳正隆②・藤島正穂②
- 吉宮とき代②・大山宇一②・川島貞雄②
- 半藤耕典②・久野敦子②・豊 羊子②
- 武藤瑞②③・浜野敏一郎②③
- 在山雅敏②③・原 敬道②③・森本憲治②
- 木原光男②③・前田 静子②③・田中和子②
- 野口 隆②③・松尾 治②③・藤野幸子②
- 富重芳子②③・星野 玄②③・丸尾 虎夫②
- 福田満須美②③・鶴田俊隆②③・丸尾 幸
- 荒巻重義②③・高木千寿丸②③・富永紗智子②
- 森志げる②③・林 千代子②③・糸山好太郎②
- 山田由利子②③・吉田洋一②③・神戸 純子②
- 渡辺美津子②③・荒谷幸子②③・藤原 卓哉②
- 山田博子②③・佐藤泰弘②③・飯田 晃
- 浜崎信也②③・(前原市)・由比章祐⑤
- (大野城市)・伊藤泰輔⑤・田代直輝⑤
- 執行敏彦②③・山田 栄②③・久野 敦子②
- (春日市)・後藤和子⑤⑥・白 水 都

- (筑紫野市)・横溝 清⑤・脇山涌一郎⑤
 - 川浪由紀子⑤・原 富子③・(太宰府市)・
 - 中村ひろえ⑤・佐々木謙⑤・古賀謹二④
 - 平岡 浩④・西尾弘子④・末松祐而
 - 蔵田はつよ④・(筑紫郡)・榎城慎也⑤
 - (粕屋 郡)・榎田正己⑤・榎田猶子⑤
 - 神崎憲五郎⑤・青木良之助⑤・友野 隆④
 - 松本雄一郎④・酒井俊寿③・鈴木惠津子③
 - 川原敏子②③・長崎榮三②③・井手伽維子②
 - (京 像 市)・益尾 太⑤・木村秀明③
 - (甘木 市)・佐野 至⑤・酒井カツヨ⑤
 - 黒川邦彦⑤・井手 太⑤・井上 清⑤
 - 宮崎春夫⑤・富田英寿④・田中トクエ③
 - (朝 倉 市)・鬼丸雪山⑤・山崎ユツ子②
 - (飯塚 市)・小山元治⑤・(浮羽 郡)・
 - 古瀬宗雄⑤・(大牟田市)・嶽村 魁⑤
 - 古賀義朗⑤⑥・古賀邦靖③・(西山 町)・
 - (筑後 市)・中島栄三郎③④・(荆 田 町)・
 - 木下 勤⑤・(北九州市)・片桐三郎④
 - 平野 巖④・市丸喜一郎④・(久留米市)・
 - 庄野陽一⑤・(柳川 市)・樺島政信
 - (直方 市)・山本利行⑤・(大 分 県)・
 - (佐 賀 市)・山本達也④・(大 分 県)・
 - 寺川泰郎⑤・田本政宏②・(長 崎 県)・
 - 浦上 健③・(熊本 県)・濱北哲郎⑤
 - (山口 県)・小山富夫⑤⑥・松井日出雄
 - (大 阪 府)・大塚博久④・前田敏也子④
 - (愛 知 県)・杉浦五郎④・庄野健次④
 - (神奈川 県)・中野晶子⑤⑥・林 田 睦
 - (東京 都)・片桐淳二②④・山根ちす子⑤
 - 村山吉廣③④・田中加代②④・大島節子
 - (千葉 県)・森 久⑤・(埼 玉 県)・
 - 間所ひさ③④・(石川 県)・丸橋秀雄③
 - (宮城 県)・田中信彦⑤
- 【協賛会員(個人)】
- 片桐 豊男(福岡)④・中村 登(福岡)⑤
 - 大里 寛子(福岡)④・広瀬 忠(福岡)④
 - 笠井 徳三(福岡)⑤・早船 正夫(福岡)④
 - 菅 直登(福岡)⑤・野口 一雄(福岡)④
 - 荒木 靖邦(福岡)⑤・梅田 光治(福岡)④
 - 浄 満寺(福岡)④・安田 蘇水(福岡)⑤
 - 奥村 宏直(福岡)④・永田 光正(福岡)④
 - 沖 双葉(福岡)④・七熊 澄子(福岡)④

当館内の現代郷土美術館にいま
展示されている大山右一画伯の
宇宙からの地球図について

(丸の課題のなかでの川柳と絵について一言
今回の姪浜忘年会の〇と〇〇という名題
は誰が考えられた案かは存じませんが
が実に見事な題と関心致しました。
つまり〇は大きい視野でとらえられ
ば宇宙の姿であります。

●丸無限青い地球を抱いている
日常生活と結ばば大根の輪切り
であり〇い煎餅でもあるのです
●大根を輪切りにする間に一句でき
●書いてお茶一服と言う和尚
又一方では限り無い深淵の心の
姿でもあります

●床の間の〇の一幅侘茶席
●動と静 達磨は丸い目で悟す
と言った具合です。
私はこれを絵にしたいと考えました。
ときめいて翔んだ向井千秋さんが空
から眺めておっしゃった「地球は青
く澄んでいた」と、私はこれを拙い
絵ですが実感として表現したく思
いました。方法としては此の絵は手先
の仕事を避け自然に画材が醸した効
果を或る一瞬でとらえ青一色の濃淡
をストップさせた瞬間の姿なのです。
世に言うアンフォルメル絵の絵画なの

です。さて如何なものでしょう。私
は平素絵画も川柳も日常生活の中
の記録であることが一つの大きな要
素で芸術につながる姿勢として大事
にして行かなければならないのでは
ないかと思っています。従って「地
球は青く澄んでいた」を画題として
結ぶことに致しました。かかる発表
の場所を姪浜川柳会を通じて与えて
下さった能古博物館庄野壽人理事長
殿に深甚の謝意を表し度く存じます。
以上

平成六年十二月十一日

大山右一



(経歴) 大山右一
一九二二年一月三日生まれ
福岡市中央区店屋町(元古小路町)
一九六二年より福岡市及県美術展を
経て二科、モダンアート全国労働展入選
等、其後フリー九州派創立委員として
メンバーに加わる。
読売アンデパンタン連続出品。
一九六三、六五年、現代美術の動向展、
芸術の可能性展、今日美術展、刀根
賞候補作品展、瀬戸内美術展、長川ア
ーティスト展出品、アーティストユニオン結
成参加。
個展四〇数回
平面と立体作品、風景、人物、面。仏
などの心象絵画を主とす。
(〒813 福岡市東区若宮四一五二六
アトリエ工房 宇庵 ☎五二六二二五)

- 熊谷 雅子(福岡)②・上田 満(福岡)①
亀井准輔(福岡)②③・富安 波(福岡)①
小田 一郎(福岡)①・滝 栄三郎(福岡)①
南 誠次郎(春日)⑤・木原 敬吉(飯塚)④
庄野 菊乃(甘木)③・大久保津智夫(嘉穂)⑤
眞野 直彦(直方)④・西喜代松(北九州市)④
森光英子(久留米)②・西喜代松(北九州市)④
永井 功(北九州)①・花田加代子(遠賀)③
本村 康雄(三池)①・中山 重夫(唐津)④
緒方 益男(佐賀)⑤・七熊太郎(佐世保)④
七熊 正(佐世保)⑤・浦上 健(長崎)②
小堀 定泰(滋賀)③・伊藤 茂(神戸)③
西村 俊隆(東京)④・白水 義晴(東京)⑤
早船 洋美(東京)①・翠川 文字(埼玉)①
石野智恵子(東京)④①・多々羅寺男(千葉)④
江崎正直(千葉)①①
会員ご氏名に⑤は、会費ご継続五年目をいた
だいたるしです。
()は多年分のまとめお払い込み、()は増口
数ご負担を示します。

【法人協賛会員および特別協力法人】

- 九州 電力 株・大野 茂(福岡)
株 新 出 光・出光 豊(福岡)
出光興産福岡支店・山本繁一郎(福岡)
株 福岡中央銀行・山本敬一郎(福岡)
法 南川 整形病院・南川勝三(福岡)
日本製粉株福岡工場・白尾嘉弘(福岡)
福岡県警備業協会・村上五一(福岡)
流通 共 済 株・花田積夫(福岡)
タイム社印刷 株・安部博満(福岡)
株 笠 組・笠 忠夫(福岡)
博多ちくわ・株 魚嘉・松尾嘉助(福岡)
権 藤 藤 株 理事事務所・権藤成文(福岡)
協 通 配 送 株・富安 波(福岡)
大 牟 田 運 送 株・本村康雄(福岡)
株 三島設計事務所・三島庄一(福岡)
日 西 物 流 株・原 重則(福岡)
西 日 本 急 送 株・原 重則(福岡)
東 岩 建 設 株 工業 株・野村六郎(福岡)
東 洋 特 設 株 機 工 株・西尾敏明(福岡)
西 尾 トラ ッ ク 運 送 株・西尾秀明(福岡)
南 愛 光 ビ ル サ ー ビ ス ・ 野 田 和 禮 (福岡)

布クリーン開発・野田和禮(福岡)
延 寿 産 業 南・池田邦夫(福岡)
九州三菱そう自販株・宮崎慶一(福岡)
南安河内商店・安河内紀男(福岡)
木原 税 理 事 務 所 ・ 木 原 敬 吉 (飯塚)
※新規の御加入(先号以後、平成七年一
月三十一日現在)は、右の地区ごとに
記載しておりますので、何卒御芳
名を御確認下さい。
ありがとうございます。

能古博物館の会

友の会 年間3千円
(館の活動、館誌購読と催事企画に参加)
自然と文化の小天地創造
協賛会(個人)年間1万円
協賛会(法人)年間3万円
館維持、資料収集、施設整備等の資
金援助を受ける

納入方法 郵便振替 0173019160970
財団法人 能古博物館
右の会費受領は、その都度本誌に掲載
以後会費相当期間を名簿にします。
【お願い】ご送金は振替用紙(送料加入者
負担)をご利用下さい。用紙はご連絡
次第お送りします。

図書出版

『閨秀 亀井少梨伝』

詩、書、画の作品で仙崖の次に多
いのが同時代の亀井少梨。しかも
少梨には艶麗な漢詩の恋歌まであ
る。これが同女の作か否か。これ
に始まる探究の書である。

B5版・表紙布装美本
限定 二、〇〇〇部
収録全カラー50頁・本文94頁
直売頒価 三、〇〇〇円
(送料 三二〇円)

◎文房具飾りと「硯屏(けんびょう)」

亀陽文庫・能古博物館では展示資料が、どうしても儒者文人が主となります。それで詩書画作品の掛軸、掛額、巻装(書画を巻ものに仕立てたもの)、折帖といったものが主になり、これに添えると筆記具である。硯、墨台、筆架(ひっか)、水滴、文鎮となり、これらを机上に整然と配置して引き立てる道具が硯屏です。

硯屏は、ほかの文房具のように、直接に用をすることはありません。自ら前に述べた筆記具のように自体に用途はありません。

しかし、この硯屏によって、机上に置かれた筆記具、それぞれの用途生命に活力を与え、その整然配置にしっかりと纏まりと景観を見せ、硯以下の道具類に生きた場を醸し出す美的効用を作ります。

硯屏を使い(置き)つけると、之を外す(取り除く)と、白々しくなつて、さまがなくなる、と言われて硯屏を絶対視される方々も多いようです。

よく言われるのですが、硯屏が絶対的に少なくなつたのは、戦後アメリカの進駐で、日本の美術品を買いあさった人達が、いち早く硯屏の美を見出して、他の筆記文具類には目

もくれず硯屏買いに集中した……という人もあります。そのせい、ほかの筆記文具に比して硯屏の無さがわかります。そのため、硯屏に中心があつた机上の文房具飾りそのものがされなくなつたことも事実と思えます。

硯屏を作れば良いではありませんか。すぐ考え付かれる意見の一つですが、これが仲々です。



硯屏には自体に美的、芸術的な装飾性を要し、形も永く鑑賞に堪えるつまり厭きのこない条件を備えなければなりません。水滴、筆架、文鎮のように一寸した細工を優然と越える品位を備えることが絶対です。

硯屏だけで、鑑賞に耐えるもの。

さすがに、アチラさんの目利きは早く素晴らしいものがあつた、と今にして思うものです。

陶工さんに、板の作品は好まれない。割れる、反りかえる等々で大変むつかしい、といわれます。

沢山のキズものができるといふことは少数の作品を割高にし、その評価がお客さんに理解され、お買い下さるか、どうか。

ロクロだけで仕上げ、多少の変形を加えるもの。これは簡単、しかも量産が可能。

博物館に、よく来て下さる陶工さんの一人に「松山一之」さん、あり。いままで、小陶器類(小さく買い易く、持ち帰りに便利)つまり服のポケットにおさまるものを、沢山造っていたいただきましたが、この松山さんが、博物館での話をきいて、なんと「硯屏」に挑んでくれました。

これが、上の写真です。

何回も試作と失敗をくりかえしたあげく、です。とにかく、ここまでやりました。作って見ました。

自分自身、まだ不満はありますが、まあ、置いて見て下さい、と。

硯屏三体、松山さんが届けてくれました。うち一つは博物館が購入しました。二点、お客さんにできるだけ見て

買います。もちろん当分、非売品にさせて下さい。従って値段も決めないで下さい。

三月には、来館者も殖えるでしょう。硯屏ができました。これも博物館の仕事と考えさせて下さい。



・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 毎週月曜
(月曜日が祝日の場合は次の日)
12月29日~1月3日
入館料 大人300円・中高生200円
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819 福岡市西区能古522-2
☎(092) 883-2881・2887
FAX(092) 883-2881